

認知症高齢者をささえる専門病院

シリーズ4 呼吸器 一命にかかわる肺炎、ぜん息などー

高齢になるほど重症化する肺炎など、呼吸器の疾患には、命にかかわる病気が多い。

白井病院では、認知症、および神経内科と並ぶ地域医療の柱として呼吸器疾患を重要視。大阪市立大学医学部や泉南地域の公立病院とも連携し、肺炎、ぜん息や、治療が難しい慢性期の疾患にも力を尽くしている。呼吸器が専門の白井誠一院長(理事長)に早期予防、受診、診断、治療につながる呼吸器疾患について、高齢者が普段から注意すべき点について聞いた。

①ワクチン接種で肺炎を予防

近年、日本人の死因順位で3位となっている肺炎。その大半は高齢者でおこっている。白井院長は、「まず、インフルエンザと肺炎球菌の予防注射を受けて頂きたい。高齢者は風邪だと軽く考えないで、早期に受診されることが大切です」と話す。

また、つばや食物が、嚥下障害から肺に入っておこる「誤嚥性肺炎」も増えているとのこと。これは、高齢者や神経内科疾患、認知症でおこりやすく、白井病院ではその予防の指導も行っている。

②ぜん息だとは気づかない「高齢発症ぜん息」

吸入ステロイド治療の導入で、ほとんどの方がよくなる気管支喘息。その中で70代や80代になって初めて症状があらわれる高齢発症喘息が問題になっている。

「ぜん息は、幼い頃に

発症する病気と思われるがちで、本人ご自身や家族の方でさえ、ただの風邪だと思ってしまうところに怖さがあります。ぜん息の発作は酷くなると命にかかわりますから、早期に診断して治療しなければなりません」と白井院長。

③発病者の大半が喫煙者「慢性閉塞性肺疾患」

慢性閉塞性肺疾患(COPD)は肺気腫、慢性気管支炎などの総称で、高齢になるほど肺の機能が落ち、咳、痰、息切れの状態が際限なく続く。発病者の95%以上が喫煙者であることからタバコ病ともいわれ、全国で推定530万人の患者がいると

される。

早期発見できれば息苦しさを薬やリハビリで軽減させられるが、あまり知られていない病気のため、受診する患者は少ない。検査は息を吐くだけで簡単に診断できる器具を使い、保険も適用される。

前記のこれら呼吸器疾患について白井院長



息を吐いて診断するCOPDの検査

は、「いずれも医者でなければ診断が難しい病気。ただの風邪や、タバコの吸いすぎだろうと思いきまず、命にかかわる前に早期受診を心掛けてほしい」という。

▽白井病院は高齢者医療に力を入れている病院。認知症、神経内科、および呼吸器疾患を中心に通院治療、長期継続入院、持病のある患者にも対応。医療福祉相談課では、認知症への対応、不安などへのアドバイス、介護の悩み、医師に受診する前の相談などを受け付ける専用窓口があり、本人や家族の悩みごとをもサポートしている。



白井 誠一 院長

しらい・せいいち / 1978年3月大阪市立大学医学部卒業、大阪市立大学医学部附属病院第一内科入局。86年10月医療法人白井会白井病院院長就任。94年5月同病院院長兼白井会理事長、日本呼吸器学会認定呼吸器専門医、日本アレルギー学会認定アレルギー専門医、他

医療法人白井会 白井病院

泉南市新家 2776

【問】TEL 072-482-2011(代)

認知症専門無料相談窓口

(月曜日～土曜日 9時～17時)

www.shiraihp.or.jp